

「日々の10分間鑑賞」実践

都立葛西南高等学校主任教諭 中西

1. はじめに

私の美術教育の目標は「美術ファンを育てること」である。そのために、「鑑賞」は欠かせない存在であると考えている。

私の実践している「10分間鑑賞」では端的なフレーズで作家と作品を紹介している。

例えば「ダリ」の授業では「髭を水飴で固めている」「ダリの時計はドラえもののタイムマシンのトンネルに出て来る」など、生徒が親しみやすいフレーズで授業を行う。

本校は「この話は難しい」と感じた瞬間にシャットアウトする生徒が多いのが実態である。そんな生徒に、どうすれば記憶に残る説明が出来るかを考え、試行錯誤しながら授業をしている。

2. 「みる力」とは

4歳の息子がある花を見て「アガパンサスだ!」と言った。私は道端のその青い花が「アガパンサス」という名前だと初めて知ると同時に、そこに花が咲いていることすら気付いていなかったことに驚いた。

美術でも同じことが言える。見たことのない作品の前は素通りしてしまい、そこに作品があったことすら気付かない場合がある。

「知る」ことでみえる世界が広がる。美術教育を通して「みる」ことを鍛えるためにもまずは「知る」ことが大事であると考えている。

本授業では2年間で40人以上の作家の作品を見せる。たくさん「知っている」作品があるということが「みる」ことに繋がると考えている。

3. 授業スタイル

最終目標:「美術ファンにさせる」ために

は授業を「楽しく」する必要がある。楽しくするためには「盛り上がり」が必要である。盛り上がるためには「活発な発表」が必要である。そして、活発に発表させる手立てとして「意欲点」をつけるスタイルを考え付いた。

私の授業では1回の発表で意欲点を1点つけるシステムで授業を行っている。このシステムが本校では上手く作用し、毎回大勢が手を挙げ発表し、楽しい雰囲気が作れている。

4. 実践

チャイムと同時に挨拶を行い、すぐに鑑賞に入る。(本校では授業と同時に挨拶をする事自体が難しいのが実態である。)

まずは復習を行う。プロジェクターを使い、フラッシュカードのように作品の画像をパツパツと見せ、作者名を発表させる。生徒の反応を見て忘れていようならヒントや説明を加え、答えやすく配慮する。



次に「今日の一作品」を紹介する。事前に配っているワークシートを使って問題を出し、書き込ませる。(19〇〇は何世紀か、というクイズですら盛り上がるのが本校の特徴である)

《ダリ》	
時代	
(生～ 没) (世紀)	
作品スタイル: () リズム	
特徴	
髭を () で固めている	
代表作品 ()	
↑漫画 () にも影響している	

これまで4種類の方法で鑑賞教育を行ってきた。



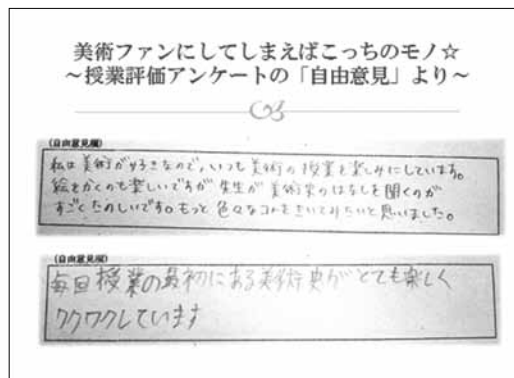
ICT機器を使うと画像を大きく見せることができるが、準備が大変ということと、生徒の反応にすぐに対応できないというデメリットもある。手持ちのA3の画像を使うと、生徒の様子に合わせて授業ができるが画像が小さく、細部まで見えない。映像「美の巨人たち」などを見せると、内容が難しいこともあり飽きる生徒も出てくる。レポートと発表は前任校では上手く行ったが、本校の実態からは避けたほうが良いと判断した。

いずれの授業についても生徒と対話することが一番大事であると考え。例に挙げた「ダリ」についても、生徒の「その髭、なにで固めるの？」などの質問がきっかけになっている。



年代によっても生徒の受け取り方や感想は変わってくる。大事なことは生徒と対話し、実態に合った教え方を工夫することであると考える。私はこの10分間で「この先生、面白い。美術って面白い。」と思わせてから制作に入ることを目標において、様々なアプローチをしている。

5. 成果を感じた瞬間



美術史を楽しみにしている生徒も多い。「ワクワクしています」などの感想もある。

作品制作でも、生徒の会話の中で「キュビズムっぽくなった」や「シュルレアリスムみたいを描いた」などを聞くこともある。

6. 課題

あまり手を挙げない生徒に、なぜ発表しないのかと聞いたところ、「テストに出ないから覚えなくても良いと思った」と答えた。こういった生徒がいるのも現状である。いかに学びの楽しみを伝えるかが今後の課題である。

7. 最後に

情報が簡単に手に入る時代である。画集がなくてもインターネットですぐに作品を見ることができ、技法が知りたければYouTubeで検索出来る。生徒が自ら学ぶ気になれば何でも出来る時代である。



学校現場で教えられることは限られているが、その限られた時間の中で生徒の本気を引き出し、「美術ファン」にするアプローチをすることがもっとも重要であると考え。